

鯉峠の伝説

赤穂市有年

昔、西有年の馬路池のほとりに、ひとりの美しい娘が、夕方になると決まってあらわれ、そして、娘は、峠のほうへと登って行くのです。

村の若者たちは、よるとさざわると、この娘の噂です。

「きつと、隣村の娘にちがいない。それにして、美しい娘だなあ。一遍でもええから話かしてえなあ」

と、心をときめかす若者もいました。

その日も、娘が馬路池のほとりにあらわれました。日が暮れかかると、いつものように峠を登っていきます。村の若者たちは、今日こそは」と思い、娘のあとをつけていきました。

峠の頂上についた娘は、立ちどまって、あたりを見まわしています。そして、山野里の大池のほうから登ってくる若者を見つけると、うれしそうにかけていきました。

若者と娘は仲良くよりそって、逢瀬を楽しんで、それから別れをおしみながら、別べつに峠をおりていきました。村の若者たちはくやしくなってなりません。

「山野里のもんじに、娘をとられたど」

「あいつは一体、何者だ」

「こらしめてやろう」

と、口ぐちにいいながら、今度は若者のあとを追いかけていきました。

若者の足ははやく、なかなか追いつけませんでした。ようやく、大池のほとりで追いつきました。声をかけようとした時です。突然、若者の姿は大きな鯰にかかりました。そして、池のなかへと消えていきました。

おどろいた村の若者は、しばらくは口もきけず、気が抜けたように、ボウゼンとしていました。フツと我に返った一人の若者が、叫びました。

「コリヤ大変だ。あの娘に知らせてやらん

と、大変なことになるぞ」

村の若者は、口ぐちに話しました。

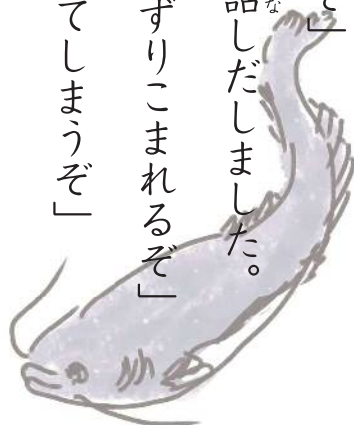
「あの娘、大池に引きずりこまれるぞ」

「あの鯰に食べられてしまうぞ」

「……………」

そして、急いで峠の道を引き返して、娘に連絡しようと、われがちに駆けだしました。

馬路池のほとりで、村の若者たちは娘に追いつきました。おどろいたのと、走ってきたのとで、若者の息はずんでいきます。とぎれとぎれに、今みてきたことを話して聞かせました。話を聞いた娘は、ニッコリとわらい、頭をさげたかと思うと、たちまち鯰の姿にかわって、池のなかに消えていきました。男は大池



の、そして娘は馬路池の主の鯰だったのです。
それから、村の若者は池のほとりや峠には近づかなくなりました。二匹の鯰は、何の邪魔者もなく、峠の逢引きをつづけることができました。

その頃、今の落地のあたりは大きな池で、そこには一匹の大蛇がすんでいました。二匹の鯰が逢引きしているうわさを聞いた大蛇は、これを襲おうとひそかにねらっていました。ある闇の夜、二匹の鯰の油断を狙って、大蛇はおそいかかり、一気に呑みこんでしまいました。

その後、何年かたちました。弘法大師がこの峠をお通りになり、二匹の鯰のあわれな恋

ものがたり物語をお聞きになりました。大師は、供養のために峠に石仏を刻んで建てられ、この峠を鯰峠と名づけられました。そして、主を失った大池と馬路池の水が絶えぬようと、大蛇の棲む池の水を、二つの池に移してしまわれしました。水がなくなった池に住んでいた大蛇は、この池をすてて、山の奥へと逃げていきました。

水のなくなった池のあとは、広い田畑となり、人びとが移り住むようになりました。これがいまの落地です。昔、大蛇（おろち）がすんでいたことからこう呼ばれ、のちに落地の字があてられたと伝わっています。